

## 南方（南洋諸島）

私を待っていたのは

サイパン玉砕地

岩手県 熊谷 音之進

「故郷は遠くにおいて思うもの」太平洋上に日  
の出る光景、新鮮な磯の香り、新鮮な海産物等を  
故郷で充分味わう日々であった。再度召集令状が  
来るのが確実であったので来るまでの間は「生命  
の洗濯」と思い気ままに過ごしていた。

そのような時に我が故郷の船主に漁船の徴用通  
知が来たと知らされる。勿論軍事物資の輸送が主  
たる目的であることは明らかであった。従ってそ  
の目的を達するための条件が必要であった。第一

の条件は船員の確保である。徴用された船は鮪延  
縄船で「第二十一号新山丸」であった。船長は、  
砂田三三さんという人で地方では信望も厚く優秀  
であり父とも親交があった。

乗組員は、全員十一人が必要であったが、現在  
十人しかいない。船長が父に説得するのであった。  
どうせこのまま家にいてもいざれ息子は徴用され  
るのだから、それよりはこの船に乗る方が良いの  
ではないか、徴用の内容は、捕獲した魚を軍に出  
せば良いのだから安全だと説明する。再々の説得  
に承諾する。乗組員七人は部落内の人達で残り四  
人は部落以外の人達、合計十一人であった。出航  
準備は既にできていた。

昭和十九（一九四四）年一月一日午前九時頃だったと思うが、船主を先頭に船員の家族は勿論、近隣の方々の盛大な見送りを受け、母港である「泊港」をサイレンの吹鳴と同時に出航する。運命の出航であるとは無想だにしなかった。

午前十一時頃気仙沼港に入港、食糧、燃料その他の物品を購入し、翌朝横須賀港に向け出航する。少々波が高かったが無事横須賀港に入港する。

翌日、船長と二人で軍需部に向き「入港届」を提出する。すると「命令」が出るまで待機せよとの指示を受ける。命令が出たのは約一カ月半後だったと思う。船員たちはこの間、退屈しのぎに横浜公園等の散策、夜は映画鑑賞等優雅な日々を過ごす。また酒好きな船員もいる。帰船途中酒に酔った船員がふらついて歩いている所を歩哨に「この戦時中に不謹慎である。その場所に休んでいる」と注意されたとの報告を受ける。船長が驚いて自分と二人で、配給の清酒を持って謝罪と身受けに行くが、兵から今後充分気を付けるよう注

意をされ、釈放され事無きを得た。その後、外出する時は何かがあるのか解らないので必ず二人を留守番に残すようにした。

この事件があつた数日後、食糧の配給を受けると同時に「梅干樽」三百個を横浜港メリケン波止場から積み、待機するよう命令があつた。夕刻、命令通り積み込みが完了した。積み込みは全員で兵隊の指示を受けての作業であつたが、意外にもその兵から「お前達は『消耗品』である」と言われる。全員、満身創痍の屈辱と怒りを込めるが反発のしようがなかった。異様な雰囲気であつたがただ黙々と作業を続けた。船積みが完了して一週間後に出航命令が出る。行先は、封筒の中にあるが、出航後二時間経ったら開封せよとのことであつた。何故口頭でなく封書であつたのか疑問であつた。

所定の時間が経過したので、船長と二人で開封すると「サイパン島に行き軍需部の指示を受け

動すること」と記されていた。その日の夕刻「八丈島」に着くが大波（時化）で接岸も、錨を投じ碇泊することもできなかった。それよりも大変だったのは、八丈島の地形や地理を知っている人物がいないことであつた。仕方なく島の辺りを航行し大波の来ない島陰で碇泊する以外にないと判断し、移動しようとした先に「灯り」を発見した。

最初は港かと思ひ安堵感が走るが、急いで近寄ると突然灯りが見えなくなる。何故だ、自船のライトをその方向に向けると「泡」を吹き出して走り去る暗影を発見する。我が方も全速力で右、左方向に舵を取る。それでも暗影の大きな物体が近づく。ライトに映し出された物体は敵の潜水艦であつた。

どうしても避けることができず体当たりを敢行せざるを得なかつた。乗組員一同顔面蒼白となる。九死に一生とはこのことか、敵の潜水艦は自船の下を悠々と潜り抜け、遠ざかるのが見えた。乗組員一同虚脱状態であつた。潜水艦と遭遇した際に

平常心を失ひ、他船に連絡することができなかつた事を今日まで後悔している。

波は収まらず入港もできず、一夜を海上で過ごす。島付近には僚船を含め約十八隻の船が同様の状態であつた。

横浜を出航する際に口頭でなく文書で命令を受けた理由が翌日解つた。八丈島に集結し「横須賀船団」として編成されるためであつた。その数十一隻であつた。波も幾分収まり一斉に船列を組み、八丈島を後に出航する。途中波も収まるかと思つて航行していたが、夕方になると再び荒れて来た。船長は、台風の余波ではないか、あるいは台風ではないかと心配していた。

夜中になるとますます風雨共に強くなり、海は想像を絶する大荒れとなつて来た。船団は、航海灯の赤、青を点滅し、信号を確認しながら慎重に航行していたが海の荒れの激しさと共に離脱する船が出て来た。時間の経過と共に統率力がなくな

り、離れ離れとなって遠くに消えて行く。海は荒れ狂う。航行不能の状態が続く。

自力で頑張るしかない。荒れと同時に多くの船員達が船酔いで倒れる。仮眠もできない。船の横揺れが始まる。船がどうなるか不安である。危険である。いつ沈没しても不思議ではない。突然、

「船長が呼んでいるから急いで船長室へ」と甲高い声が飛ぶ。急いで船長室へ。船長は青覚めた顔で危機脱出の方途を話していた途端倒れる（船酔い）。

悲愴な声を腹の中から出して「何とかこの場を君に頼む、やってくれ」と懇願される。時間も経ったのだから海の荒れが収まるかと思っていたが収まりそうに無い。他の船との交信もない。船を保つためには横波を避けなければならない。

船は右往左往する。押し寄せる波は壮絶な勢いだ。一波喰らうと沈没する恐れがある。ラットは波のために振り廻される。羅針盤は一回転するありさま。舵もままならない。船を思うように操縦

することがなにより大事なことであった。咄嗟の判断で振り廻されるラットを縛り、風を遮断するために船尾のマストに登り「三角帆」を揚げる。すぐ帰ろうとした途端、船は横に傾く。船べりに縋がりやつの思いで助かる。

三角帆のためか幾分船も落ち着くが、エンジンの音は相変わらず物凄いい。フル回転である。海に投げ出されないように体をロープで縛って頑張る。銀色に砕けて来る波、両方から波が立ち上がり折れて押し寄せる三角波、船尾が浮くとスクリューが空転する。その度にエンジンが高鳴りする。船長と交替してから三時間経った頃だと思いが不意に「横波」を喰らう。船は一時横に傾く。沈没を覚悟したが、次の瞬間船が復元し海水は船上から瀧のように流れる。

このような状態がしばらく続く中、機関長が心配して「大丈夫か」と船長室に来る。「今の所は」と応える以外に回答のしようがなかった。自分の

心配は機関の調子であったので機関の方とは聞くとお互いに目と目を合わせ大丈夫だと確認する。真剣であった。大自然の恐ろしき、人間の無力さとの闘いである。船は進まない。二昼夜を過ごすのが夜明けと共に破天荒だった海は嘘のように収まった。地獄で仏に会うとはこのことかと思つた。そして船長、機関、積み荷に何らの被害もなかったのが不幸中の幸いであつた。そして無事を喜びあつた。

昼は目的地へ向けて航行した。夜になるとまた波が高くなつて来たが、雨が降らないのが幸いであつた。一晩中苦しい航行だったが、夜明けと共に収まり「べた風」となる。猛威を奮つた「時化」は虚構の世界にあつたとしか思えなかつたし、自然の厳しさを改めて認識した。

前方に突如指揮艇が現れる。間もなく自船に接舷する。マイクで他の後続船の状況を問われるが解らないと応える。自船の安全確保だけが精いつ

ぱいで、どうにもならなかつた旨伝える。無常、非情であると思われるかもしれないが、あの状況の中ではなにもできなかった。

指揮艇から現在のコースを航行すれば小笠原諸島に着くからと指示があり、頑張れと激励を受ける。指揮艇は他の船を探索するからと話して離れる。

間もなく左側に小さく島が見える。確かに父島と思うので急ぐ。夜明け前小笠原諸島の母島が見える。入港準備に入る。入港直前の信号が上がる。同時にライトが光る。我が船も「徴用船旗」を揚げ許可を得て入港する。

久方ぶりの入港なので、船長をはじめ船員達の顔色が良い。朝食も美味しかった。一休みしてから全員で船の総点検を行う。あの時化の中での航海のため、相当痛んでいるだろうと船長と心配していたが、点検の結果、左舷の縁側が多少痛んでいた程度であつた。予想外に少ない被害に安心する。早速修理にかかる。

横浜港を同時に出航した仲間の船二隻が、我々が着いた翌日入港してきた。しかし、他の船は二日経っても三日経っても入港して来なかった。多分あの時化で遭難したのではないかと思った。

軍から次の指示があるまで待機せよとの事であった。小笠原諸島は暑かった。皆で海水浴等を楽しみながら楽しむ。自分は「鱈」等を捕らえて食べる。うまかった。

二日後「呉船団二十三隻出港」した旨の連絡があり「到着まで待機せよ」と軍から連絡が入る。連絡があつて一週間後に入港したのは七隻で、残り十六隻は不明とのことであった。横須賀船団と呉船団の協議が行われた。その結果、横須賀船団は呉船団の指揮下に入るようになった。船団を再編成し、小笠原諸島を後に出航する。

呉船団は貨物船で編成されていたので船足が遅い。反対に横須賀船団は漁船なので船足が早い。追い越そうとすると指揮艇より注意を受ける。無

視しようとする機関銃を向けられる。船長は、兵隊が乗り込んでいるし兵器等も積載していると話していた。自分もそう思った。船団から離れて航行した方が安全だと思い、途中、横須賀船団三隻が相談して「安全航行」のためには、船団から離れることであつた。そこで、一隻の船が故障したと指揮艦に手旗でその旨を伝え、引船で航行するので了解を得る。時間の経過と共に呉船団が遅れ、肉眼では確認できない位の距離となつた。右舷側に硫黄島が見える。実に穏やかな航行であつた。

船の先には、夫婦鯨かと思うが仲良く、何事も無い自然界の中で高く潮を吹き上げて泳ぎ、それに朝日が当たり素晴らしい光景であつた。呉船団とは相当の距離を保ちながらの航行であつたが夕刻にはアナタハン島に近づく。船長から「今晚は、アナタハン島に碇泊する準備せよ」との命令が出る。錨を降ろし、準備が完了する。

予想もしていないことが起こった。島民が「カナカボート」で船に近づく。歓迎をするのであった。言葉も良く理解できなかったが仕草で煙草を欲しいのだと判断し「誉」を何個かやると島民が島に戻り、返礼として積んで来たバナナ等の恵贈を受ける。

その後船団の船員が島に上陸する。馳走は「バナナ餅」であった。バナナ餅は、バナナと椰子の実の中の白い「コプラ」と混ぜ合わせて作った物らしい。日本では食べることはできない珍品で日本の「羽二重餅」のようであった。夜になると三個所に椰子油を焚いて明かりをとる。タイムツは昔の武士の陣営のようであった。しばらくすると歓迎のダンスが始まる。ある船員は、これに「ギター」の伴奏でもあつたら最高だと話す。それに「椰子酒」も出る。

歓迎行事も後半となると島民達が片言の日本語で「見よ、東海の空明けて……」と歌う。驚きの一言に尽きたし、感心もした。島で一夜を過ごす。

夜明けと共に島民がカナカボートに、バナナ、レモン、椰子の実、椰子蟹等を満載してくる。お土産として頂戴する。椰子蟹は、椰子の葉で縛られていた。この日は船員の休養日となる。夜は暑くて全員裸になりデッキで休む。ところが頂いた「椰子蟹」が逃げ出し、休んでいる船員の腹の上を走り廻る。皆びつくりして飛び起きる。こんなハプニングもあつた。

翌朝、三隻でサイパン島へ向け出航する。一日の休養と充電で船員の顔色が良い。エンジン音も快調である。出航後、左舷側前方にバカン島が見えて来る。待望久しく目的地であつたサイパン島に翌日入港する。

サイパン島には完備された船着き場がないため、止むを得ず五、〇〇〇トン級の御用船の側に碇泊することにした。碇泊と同時に掃除が始まる。終了してからアナタハン島で提供を受けたバナナ、レモン等を出して朝食をしていたら、隣の御用船

からロープが下ろされる。何事かと思い、ロープの先を見上げると、バナナを恵んで欲しいとの懇願であった。三房位と思ひ、ロープに結び上げる。勿論一房といつても二十キロはあつた。その代わりに煙草が降りて来た。

艦上には、数多くの兵隊達の姿が見えるし船首と船尾には、小さいながら大砲が装備されていた。さらに機関銃も数多く見受けられ、軍艦と何ら変わらないと全員で話し合った。

食事終了後、軍需部に入港の報告をするために船長と共に向う。軍需部からは、次の命令があるまで待機せよとの命を受け、帰船する。その後、我々と同業の漁船が入港する。「何故入港して来たか、なにかあつたのか？」と矢継ぎ早に問いかけると、敵の潜水艦が発射した魚雷が船の胴体を貫通した。全員で貫通した穴に布団二枚を当て、板で釘止めの応急処置をし、サイパン島が近いので「命辛々」逃げ入港してきたとのことであつた。

魚を採る本来の漁船である我々の船も、現在は、

軍部所属となっているが、いつでもどこでどうなるか心配になって来た。三日程待機することになるが、軍から出航の命令が出る。「本国より積荷した梅干三百樽（一樽といつても二十キロはあつた）をロタ島に荷揚げせよ」であつた。直ちに出航する。

ロタ島には約五時間を要して入港する。ロタ島には事前に待機していた二十人程の作業員と共に荷揚げを始める。作業は二時間程で終了する。終了後、船の点検を行い直ちに出航したが、潮が引いていたのに気付かず「珊瑚礁」に乗り上げ、自力では脱出できず、満潮になるのを待つ以外に方途はなかつた。船傷、機関の故障もなく無事脱出。夕方サイパン島に帰港する。繋留後、船長と一緒に軍需部に、命令の通り「作業が完了した」ことを報告し、意気揚々と帰船した。

一難去つてまた一難、実に誰もが予測できない事件が起きる。我が船「新山丸」には、船長以下十一人が乗り込み、一致団結、船長を中心に一糸



乱れぬ行動で難事を切り抜けて来たのであったが、十六歳の少年の行方が分からなくなっているとの報告を受ける。具体的な理由は話されなかったが、同じ年のもう一人の少年のイジメが直接の原因であるとのことであった。海に飛び込んだという。早速留守番を残し、二人一組で捜査に入る。自分達は海岸伝えに歩くが暗いのでなかなか前に進まない。

夢中になって探していた時、挙動不審との理由で憲兵隊に捕まると同時に憲兵隊本部に連行される。本部で尋問を受ける。何のために海岸を徘徊していたか……。事情を説明し了解を得たが「お前達の船はどこから来たか」と問われる。岩手県の漁船で徴用され軍務に就航している旨話す。すると上司の憲兵も岩手県出身であると話す。同郷の様子等話し合った。

特に親近感をもつが間もなく「行方不明の少年を早く探せ」と励まされる。月明かりの捜査は困難であったが大木の蔭に動く物があるので近寄つ

て見ると少年であった。少年の体は震撼し、涙を流し踞っていた。

理由を問い質した結果、少年同志の問題であったので説諭し、船に帰る。全員少年の帰りを心から喜んだ。自分は事情を船長に報告する。その後船長から訓示を受ける。戦時下外国において軍務に服しているのだから、船員が一致団結して任務遂行しなければならぬ。船は一軒の「家」である。船員は家族だ、お互いにその気持ちになって努力してほしいと。

戦況の情報は、余り徴用船には入らない。心配してもどうにもならない状況下で碇泊のまま日々を過ごす。数日後、軍需部から「セメントを積み、トラック島に出航せよ」との命令が来る。作業員三十人位と共に積み込み作業に入る。終了した時点で船体の状況を確認すると定量トン数を超え航行は危険な状態であったので、上官に申し出ると「軍の命令」だと言い放ち馬耳東風であった。

さらに高射機関銃二十五ミリ機銃一台、機銃二連双二台、酒樽一個。酒樽は良いとしても兵隊が数十人乗船することであった。積荷トン数が過重で航行中いつ沈没しても不思議でない判断し、上官に嚴重に抗議した。上官は軍の命令であるとの態度は変わらない。一方危険であるとの押し問答中に、突然「停止」命令が出る。何故だ、一時騒然となる。我々に理由は説明されなかった。

今度は、積み込んだセメント荷揚げ作業に変わる。その時、我が国の御用船団が、軍の指揮班、数隻の警備警護を受け、南方方面に航行中、敵の潜水艦に依って撃沈され、武器や弾薬は勿論、船共々海底の藻屑となった。兵隊、船員の犠牲者が多く出た。救助された人たちは裸であった。作業中であつたので適確に把握できなかったが、かなり沢山の人が上陸したのをこの目で見た時、生きた心地がしなかった。積荷の荷揚げも夕方には完了した。

サイパン島警護のために飛んでいた哨戒機も一

夜を過ぎすと飛ばなくなった。敵の大艦隊はビルマ作戦に移動中であるとの情報が入った。そのため日本の軍機はビルマ作戦に参加したのだと思つた。

今後我々は、どうなるのか？ 異国の地で、心配であつた。ところが「敵の大艦隊は、突然進路を変え、サイパン島に向かっている」との情報が入る。

五月半ばと記憶する、敵の偵察機、二機が来襲する。サイレンが止むことなく鳴り響く。空襲警報だ、右往左往しながら退避する。無我夢中で何をどうしたのか全く記憶が無い。低空飛行に対して高射砲・機関銃が一斉に撃つ、命中した一機が海中に墜落するのを軍が確認すると艦艇が全速力で急行、二人の敵兵を拿捕したのを連行して行った。その時捕虜は目隠をされていた。

船内には、いろいろの情報が乱れ飛んだ。確實だと思われるのは、敵の機動部隊がサイパン島に

接近していることだった。

軍の命令が出た。敵の総攻撃を予測してだと思  
うが「船を移動せよ。できるだけ離れ離れに移動  
させて碇泊せよ」とのことであった。一斉に基地  
港内の作業が始まる。目的は空爆の際の標的にな  
らぬように、さらに被害を最小限に止めることで  
あった。我が船も、基地港から離れた所に錨を下  
ろす。

翌朝、島の南方からサイレンが鳴り響く。湾の  
高台に設置された「信号」が上下する。敵機来襲  
の合図だ。我が船には機関銃一機が装置されてい  
るが無防備同様だ。特に我々は一昨日の状況を見  
ているから、サイレンを聞いて全員一同緊張感が  
漲ると同時に不安が募り、物につかまり震えてい  
る者もいる。

サイレンが鳴って間もなく敵機来襲、雲の切れ  
間から相当数で上空の旋回を始める。一機が爆弾  
を投下しながら低空で突っ込んでくる。高射砲・  
機関銃で迎撃するが徒労だ。高射砲の着弾点より

敵機の高度が高く、機関銃の命中率も悪かった。

最初の飛行機が突っ込むと同時に、敵機が一斉  
に爆弾を投下しながらの攻撃が何回も繰り返され  
た。港に碇泊している御用船の船首と船尾にある  
火砲も懸命に応戦している。

空爆が始まってからの位時間が経ったか解ら  
ないが、だんだんと御用船を目標とするようにな  
ったことが解る。一発が命中すると同時に船中か  
ら火柱が上がり、同時に船体は火の海となる。両  
舷から縄梯子が降ろされ、梯子を使って逃げる者、  
海中へ飛び込む者、船に接舷して救助するボート、  
自力で泳ぐ者等。そのうちに船が傾く。「危険だか  
ら離れる」と指揮する指揮官の様子などが見える。  
いくらか経たぬうち、船は傾き沈没した。惨憺た  
る光景は生涯忘れることのできない深い心の傷で  
あった。

しかし敵機の攻撃は続く。我々の船も港から余  
り遠くない所に碇泊していたので、他の船が機関  
銃で応戦していたが、二時間位して敵機は一斉に

帰還した。

この空襲で我が方の損害は計り知れないが、我々が目撃した範囲で二十三機の敵機が撃墜され、敵の潜水艦が、敵機の墜落地点で飛行士を救助しているのが肉眼でも確認できた。午後からも空爆があるものと覚悟していたが無かった。しかし、星空の下で床につくが、今日の戦闘状況が臉に焼き付いてなかなか眠れなかった。

翌朝、朝食が終わり、昨日の状況を話している時、またサイレンが鳴り出す。サイレンが鳴り終わるか終わらぬうちに「敵機大軍」が現れる。昨日よりは遥かに多い。サイパンの要塞地であった細長い島、「軍艦島」に一気に攻撃して来た。

我が方も、高射砲、機関銃で必死に応戦するも、軍艦島は時間と共に影も形もなく全滅する。我々の船も危険な状態となるので、敵機の攻撃を避けながら港外の比較的攻撃的になり難い岸壁に付け、船員九人を上陸させ、山林に避難させる。船長と二人で飯を炊き、先の上陸させた九人分の「握

り飯」を持って、これが故郷を出港以来の「第二十一号新山丸」と最後の別れになるとは、思いも及ばなかったが、船員達の避難先の方向の山中へと急いだ。

低空で来るグラマンからの機関銃掃射を逃れて、山中で大勢の人と一緒にいた九人の船員を見付けた途端に「安堵と疲労感」が同時に出て、その場に倒れるように腰を下ろした。その時、敵の動向を双眼鏡で見張っていた小型戦車隊長から「敵の飛行機は全部基地に帰ったが、今度は大艦隊が見える。島の方へ航行している」。さらに「敵の艦隊は、段々近づいて、島を二重にも三重にも包囲している。艦は、日本の軍艦に例えると『武蔵』『山城』級の戦艦だ」と言って、隊長はその場を去った。

これを機に車座になり握り飯を食べようと手を出した瞬間、轟音と同時に、敵艦の主砲より発射された一発の弾丸が下の方に着弾破裂する。蜘蛛

の子を散らすという比喩があるが、まさにそのとおりで皆、散り散りになる。しばらくして船員を確認すると七人はどこへ逃げたのか行方が解らなくなつた。

地理的に不案内な我々は逃げ場を失う。大木の下で他人の動向を調べている時、一人の兵が先頭に立って走り去るのを見たら、それに連れられ何百人かの人々が列をなして逃げる。これを発見した敵機が、爆弾を投下する。機銃掃射、爆弾が炸裂する度に人間が吹き飛ぶ。

集団での避難は攻撃の目標となり、危険であることを知っていても島の地理が解らないので、誰かを頼る心理が一層強くなり、集団となるのは当然であつた。艦砲射撃は全島へわたり、ますます激しくなる。一方空爆も続く。どこへ避難しても、安全な場所はどこにもなかった。夜間が安全という「神話」は虚構であつた。我々が動くと言が飛んでくる。

六月十五日、敵が「サイパン島に上陸」との情報が入つて来る。追い詰められた所は、谷間であつた。集結した人員、二千人以上と思われる程であつたという。生き残つた者にとつて、水と食料と、どのように生きるか。

通信機関が途絶え、七月七日、サイパン島守備隊は全滅した。

#### 【解 説】

体験記執筆者は、徴用された漁船「新山丸」の船長と親交のあつた父からの話もあつて、この徴用軍用船の乗組員となり、梅干し、セメントなどのサイパン輸送の任務に着いた。

途中、敵潜に会い、台風に会い、米軍のサイパン反攻に遭遇して捕虜となる。

サイパンは、大本営によって策定された「絶対国防圏」に内包される地点で、その「絶対国防圏」の範囲は「帝国の戦争目的達成上絶対確

保を要する圏域」として千島列島、小笠原諸島、内南洋（マリアナ、東西カロリン、マーシャル諸島）西部ニューギニア、スンダ列島、ビルマという広大な地域であった。

これだけの範囲の防備は困難であり、大本営は満州の関東軍の一部を転用し、あるいは再召集兵を含む部隊を新編成して各地に派遣、充当することとなった。既に太平洋は米潜水艦の跳梁する海域となり、南方へ向かう途中で海没する部隊は後をたたず、補給も徴用船、潜水艦に依存する部分も露呈していた。前記の「絶対国防圏」を策定した年には、米軍はギルバート諸島を攻略し、内南洋に進攻することは時間の問題となっていた。

当時、軍部は、米軍はサイパンを素通りする、との観測もあったが、六月十一日、米機動部隊の艦載機延べ百八十機による空襲によって、サイパンは米軍反攻の指向するところとなった。

こんな時期、徴用船に乗った体験記執筆者は、梅干し三百樽を積載して出港する。途中台風に遭遇、ロタ島、アナタハン島での寄港、座礁などの事故もあったが、ようやくサイパンに到着する。

翌十二日、米機延べ四百八十機の攻撃があり、十三日からは艦砲射撃も加わり、サイパンの街は灰燼に帰している。そして十五日、艦砲射撃とともに米軍の上陸用舟艇はリーフを目標して前進を開始した。

執筆者は、この空襲や艦砲射撃の激しさを記録しているが、六月十一日から四日間に米軍が投じた砲弾・爆弾は三千五百トンにも上るとい

う。執筆者は当時のことを振り返り『この光景は、生涯忘れることができない。私にとつては深い心の傷であった。私の船は港から余り遠くない

所に碇泊していたので、他の船が機関銃で応戦していたが、二時間位して敵機は一斉に帰還した』と記録している。

そして、星空の下で眠りつくが、今日の戦闘状況が臉に焼き付いてなかなか眠れない。

敵のサイパン島上陸により、皆が追い詰められた所は谷間であった。集結した人員、二千人以上と思われる程であったという。生き残った者にとって、水と食料と、どのように生きるか。

通信機関が途絶え、七月七日、サイパン島守備隊は全滅した。

## ベララベラ島戦記

京都府 矢野 英雄

昭和十六（一九四一）年五月十日、海軍志願兵として舞鶴海兵団入団、昭和十六年八月末、舞鶴鎮守府第一特別陸戦隊として海南島勤務を経て、館山海軍砲術学校対空砲科を卒業後、舞鶴海兵団第四分隊に入隊、昭和十八年二月、呉・舞鶴両鎮守府合同で呉第七特別陸戦隊が編成され、その戦車隊員として参加する。

そして館山海軍砲術学校に陸戦隊員全員が集結し、後、陸戦訓練を受け、昭和十八年四月、中部ソロモン群島方面に展開する。

さらに戦局重大化のため、軍港呉港より戦艦「榛名」「金剛」に分乗、トラック島を経てラバウルに上陸する。ここで連日訓練を重ねながら待機する。

昭和十八年四月末、この頃制海権はすでにアメリカ軍にあり、呉七特全部隊の行動は制約され、